

札幌の「星座」 たなか踏基

大学同窓会の全国総会参加（札幌開催）のため、寝台特急「北斗星」で札幌に着いた。殆どの会員が飛行機で参加。幸い切符が取れたので、私は16時間夜行列車に揺られた。じつくり北の大地を理解するには、時間掛けて、往時の人が札幌を訪れた心境に近付こうと思っただからである。昔北海道の人は、津軽海峡を常に意識したと聞く。そこに内地の人との諦めに似た隔たりを感じたようだが、牽引電気機関車の交換が、EF81から79型に青森駅であるが、青函トンネルは易々と内地の人を北海道に運んでいく。それでも、飛行機の80分では余りに勿体ないと思っただからでもある。

札幌駅の駅名を仰ぐと、星をデザインした大きな丸い時計下の表示板は如何にも、北の大地に着いた感じがする。ぶらぶらと街を散歩したら、有名な時計台の辺りにでた。多くの観光客が群がって写真を撮っている。客を乗せ街中を歩く飾った馬車は、「時計台乗合馬車」で、昼飛込んだラーメン屋が「味の時計台」。注意してみると「時計台」と付く看板の何と多いこと。曰く「時計台バス」「時計台歯科医院」「時計台駐車場」・「些か食傷気味だ。

多感な有島武郎も憧れて、札幌に来たのであるうか。『星座』は、最初長編構想とされたが、作者の死によつて、未完のまま絶作に近い作品となった。大正十二年、婦人公論記者で人妻波多野秋子と軽井沢の別荘で心中。

有島武郎がこの時計台近くの場所を訪ねて

来たのは、明治二十九年八月で、足掛け六年間札幌農学校教授渡新戸稲造の白官舎に寄寓したようだ。有島武郎は、時計台近くの農学校の校舎に通いながらキリスト教の洗礼を受けている。然も、友人に誘われて渋々だったと聞く。軍隊生活の後に渡米後に、懐疑的となりキリスト教から離れる。『カインの末裔』をデビュー作に作家活動に入る、所謂「白樺派」の中心人物である。現在札幌は、人口百万人を超え、駅前高層ビルが林立し、首都圏東京・大阪に匹敵する大都会であるが、当時は僅か四万人強の人口しかなかったようだ。

内村鑑三らが創設した札幌独立キリスト教会の仮会堂に、『星座』の主人公「星野園」は通う設定である。時計台（演武場）の窓からの眺めは、道庁赤煉瓦やポプラ並木が一望できるのだが、今や歳月は百年余も移るい周辺の高いビル街の谷間に埋り面影もない。

△段と段との隔たりが大きくておまけに狭く、手欄もない階子段を、手さぐりの指先に細かい塵を感じながら、折れ曲がり折れ曲がりしているのだ。長い四角形の筒のような壁には窓一つなかった。その暗闇の中を園は昇っていった。何んの気だが自分でもよくは解らなかつた。左手に小さなシラーの詩集を持つて。頂上には、おもに堅い木で作った大きな歯車や梃子の簡単な機械が、どろどろに埃と油とで黒くなって、秒を刻みながら動いていた。四角の箱のような機械室の四つ角に掛け渡した梁の上によつと腰をかけて、おずおずと手を延ばして小窓を開いた。その窓は外から見

上げると指針盤の針座の直ぐ右手に取り付けられてあるのを園は見えておいたのだ。窓はやすやすと開いた。それは西向きだった。そこからの眺めは思いのほか高いところにあるのを思わせた。直下には裁判所の樺色の瓦屋根があつて、その先には道庁の赤煉瓦、その赤煉瓦を囲んで若芽をふいたばかりのポプラが土筆のようにむらがつて細長く立っていた。

深い綿雲に閉ざされた闇の中、霰の群れが押し寄せて手稲山から日石の方へと秋さびた大草原を駆け通る。凍て付く北の空に響く鐘の音は飽くまでも冴え、小賢しい冬の先駆の蹄の音、霰が小躍りして夜更けの札幌の板屋根を叩く情景が描写される。寂寞感が襲つた。

小説は、世の中への出立をひかえ、札幌農学校に学ぶ若者たちが、懊悩の彼方にのぞかせる、ささやかな清々しさと希望、若い魂が繊細な輝きを放つ一群の星々となる過程を描こうとしている。大正十年、「新潮」第35巻に「白官舎」として発表されたが、後に後半を書き足し『星座』第一巻とされたようだ。

同窓会の懇親会が終り二次会を中座し、おぼつかない足元で私はホテルの外に出て、酔いを冷ましに舗道をふら付いた。既に街の灯りにかき消され、振り仰ぐ夜空に星々の断片は見えない。それでも、札幌は星座がことのほか良く似合うと感じたから不思議である。

次回北海道を訪れるとすれば、家内と二人で、横浜に似て異国情緒が未だ残っているという函館を訪ねてみようと思っている。